末

四年

画数 5
筆順 一 二 三 末
オン マツ・バツ
クン すえ

成り立ち

〝木〟という字の〝こずえ（木のすえという意味）〟にあたる所に〝一〟のしるしをつけて、「この字は、木の〝すえ〟という意味を表した字ですよ」と示したものです。（このような成り立ちの字を〝指事文字〟といいます。）

〝こずえ〟という意味の字ですが、今では木にかんけいなく、〝すえ（あとの方）〟という意味に使います。例末っ子、末端、末流、末世、末期、終末。

この字の反対の意味の〝本〟が〝たいせつ〟な意味に使われるのにたいし、〝つまらないもの〟の意味に使われます。例粗末。

使い方

▽ぼくは三人兄弟の末っ子です。一番上のおにいちゃんは優しいのですが、次のおにいちゃんは、よく、ぼくをいじめます。末っ子は損です。

▽粗末な家に住んで、粗末な食べ物を食べても、それなりの楽しみはあります。豪華な家に住んで、きれいな服を着て、ぜいたくな食べ物を食べたから、幸せだとは限りません。いきいきとした好奇心や、何かをやれたという充実感などが、幸福につながるのだと思います。

熟語例

▽末っ子（一番しまいに生まれた子供）

▽末端（ものの一番末。一番端。「組織の末端にまで目を配る」などというふうに、つかいます。）

▽末流（末の流れ、という意味から、〝子孫〟〝末のつまらない流派〟などという意味につかわれます。「わが家は桓武平氏の末流だ」などというふうに、つかいます。）

▽末世（末の世。仏法や正義のおとろえた時代）

▽末期（おわりの時期。「江戸時代の末期」など）

▽末期（一生のおわり。死ぬ時。「末期の水」など）

満

四年

画数 12
筆順 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿 ⿰氵廿
オン マン
クン みち・みちる

成り立ち

〝二十〟で、〝多い〟ことを表した〝廿〟と、「二つで一組」を意味する〝両（3年439）〟と、河の意味を表した〝氵〟とを組み合わせて作った字です。

「多くの河が合流して一つの大きな河になる」ことを表した字で、「水が〝いっぱいになる（みちる）〟」ことを表したものです。例満水、満期。

今では、水にかぎらず、「物がいっぱいになる」意味に使われます。例満員、満腹、充満。

また、〝十分に〟という意味に使われます。例満喫する、満悦、満開。

使い方

▽東京ドームに野球を見に行きました。客席は満員で、空いた席はどこにも見あたりません。ドームの中には熱気が充満していました。

▽桜が満開だというので、みんなでお花見に行きました。ピンク色の桜が雲のようにびっしりと咲いているのは、とてもきれいでした。お弁当を桜の下で食べました。春の気分を満喫して帰りました。

熟語例

▽満水（水がいっぱいになること。「ダムが満水になったので、少し放流しなければならない」などというふうに、つかいます。）

▽満潮（海の水が、一日のうちで一番高くなること。対「干潮」）

▽満員（人がいっぱいになること。）

▽満腹（おなかがいっぱいになること。）

▽充満（あるところに、何かがいっぱいになること。「ガスが部屋に充満した」などというふうに、つかいます。）

▽満喫（十分に食べたり飲んだりすること。また、広く、十分に何かをしたり味わったりすること。）